

「日本応用老年学会 第12回大会」

演題「セカンドライフ移行期の男女と地域との関係について

～地域デビュー応援講座のフィールドから見えてきたこと～

■ 研究の背景

日本人の寿命が延び人生90年、100年時代と言われるなか、65歳まで会社で働く時間が9万時間前後であるのに対し、65歳からの自由時間が約10万時間あると言われ、膨大な自由時間が定年後に出現している。

これまでの一般的なサラリーマンの人生を考えると、子どものころは親や学校が引いてくれたレールの上を走り、会社に入ってから組織が引いたレールの上を走っていればそれでよかった。つまり受身的な生き方でよかったのに対して、定年になると突然自分の生き方の選択を迫られる。会社に勤務していた時には、決められたトラックの上をルールに従って走る人生はトラック競技だと思っていた。しかし、定年になると突然「これからはスタジアムの外で、走る場所・ルート、ゴールを自分で決めるマラソンです。」と宣告されるわけで、膨大な定年後の時間をどうデザインするのかという課題を突きつけられ呆然としてしまう人が多い。

■ 何をつかもとしたのか？

60代プレシニアの「充実したセカンドライフ・居場所を開拓したい」というニーズに応えながら、自治体として「地域の支え手にまわる人達を増やす」ことを目的に開催されている地域デビュー応援講座について、その効果や課題、改善点を検討する。

対象は、阪神間にあるベッドタウン宝塚市の主催する「づか塾」。この講座は、2007年に団塊世代の地域デビューを支援することを目的としてスタートし、他の自治体の団塊塾が数年で廃止されていくなか、10年以上経った今でも継続している。運営は、途中から塾の卒業生達が立ちあげたNPOが担っており、9月末からの半年間で14の講座+地域活動とボランティア活動を体験するプログラムで構成されている。

■ どのように調査したのか？

神戸大学アクティブエイジング研究センター片桐准教授との共同研究として実施した。

地域デビュー応援講座を受ける前後でセカンドライフ適応力、ソーシャルネットワーク、地域社会への知識・関心度がどう変わるのか 質問紙調査を行い、事後はヒアリングを加え、また講座中の行動観察も加え、プログラムの効果や課題、参加者のインサイトを考察した。

「セカンドライフ適応力」とは今回神戸大学と新たに考案した評価軸である。地域のヨコ社会で自分の状況を受け入れ、役割と出番を創出していくことに必要な力で、”①変化を受容し自分を創造していく力、②仲間を作っていく力、③次世代に継承していく力、④実務力”の4つで構成している。

■ 受講生の年齢構成

男女ともに12人ずつ。ほぼ60歳代で、平均年齢は男女とも約65歳。

■ 調査した結果

講座参加の理由は、地域デビュー応援講座であるにもかかわらず、「地域活動がしたいから」は男女とも少なく、「新しい知識を得たいから」が圧倒的多数を占めた。

① 受講生の各講座の評価

講座内容によってばらつきがあるが、「アウトドア体験系」や「コミュニケーション促進系」が高く評価された。

② 地域社会への知識・関心度

「宝塚市のことを知っている」「地域活動に積極的に参加したい」「住んでいる地域に貢献したい」と答えた人が講座終了後に増加。

③ セカンドライフ適応力

受講前と受講後の自己申告の変化は、積極的に参加しリーダー的な役割を果たした男性2名、女性1名で、女性が受講前に比べて受講後にいずれの項目も自己評価が高まったのに対し、男性は項目によってはむしろ下がっていた。

③ 全体の講座についての受講生の評価

講座に参加して良かったことは「地域のことや地域活動について理解できた」とか「知識・情報が得られた」こと。“全体として講座は役に立ったか？”との問いには女性より男性の方が「かなり役に立った」という回答が多かったのに対して、“4月からやりたいことが見つかったか？”に「はい」と答えた人は男性は女性の半分にすぎなかった。

■ 考えられること

「参加動機関連」「参加して良かったこと」「期待外れ・改善点」「4月から何をしたいか」についてのヒアリング結果も踏まえると、自治体の開催目的と受講生の申込動機に乖離があり、受講姿勢・効果は男女差が大きかった。

講座参加の理由は、地域活動を行う以前の「まず高齢期を生きるための新しい知識・居場所を得る」であり、地域の状況が判らずに地域社会が自分事になっていなかったのをそれを解消したいとの思いが強い。

男性は、とりあえず孤立感の解消、仲間・居場所作りで満足していたのに対し、女性は知識や出会いを得て、お互いに誘い合って次の活動に進むと男女間に差が見られた。

とりわけ男性にとってはタテ社会＝会社組織の中で課長、部長、役員などと言われ抱いていた自己イメージと、ヨコ社会＝肩書・経歴の通用しない地域での現実との落差を体験する場にもなっていた。

地域活動への参加、継続のモチベーションは「自分に合った楽しさをみつけること」で、開始後は男女とも“交流”を促す仕掛けを欲していた。

■ 結果（提言）… 有効な地域参加促進プログラムづくりに向けて

プログラム構成としては、①初期段階の目標を、凝集性を高め、仲間づくりを促進することとし、話しやすく、交流しやすいグループワークを増やすこと、②早い段階で各参加者が自分の興味・関心やそれに合致した活動について具体的に考え、その考えをわかち合い、周囲からサポートを受ける機会を設けること、③その後適当な時期に、参加者と興味のある活動グループとのマッチングイベントを行うことが考えられる。

運営については、参加者それぞれの状況を見ながら参加・交流度を高めるガイド役を配置することが望まれる。

今後、65歳からの10万時間という個人の課題を社会の資源として活用する仕掛けづくりが重要になると思われる。

本発表に対し、会場から「男性の地域参加を促すにはどうしたらよいか?」、また応用老年学会ではめずらしいの内容の発表だったため「なぜこのような研究をしようと考えたのか?」などの質問がありました。

以上